都道府県別賞一等

祖母からのお守り

長崎県　長崎市立緑が丘中学校　一学年　中村　円香

「保険に入ったからね。」以前、祖母にそう言われた事がある。当時、保険の事について何も知らなかった私は「何それ？」と聞き返した。祖母によると、私が入った保険は、病気やケガをした時、亡くなった時などに、掛金を払っていればお金を受け取れるというものらしい。それまで重い病気などにかかった事がなかった私は『必要な時なんてくるのかな。』と思っていた。

この作文を書くために、私はもう少しくわしく保険について調べてみた。生命保険は、定期保険や養老保険など、いくつかの種類に分けられている事など、いろいろな事が分かった。その中でも私が注目したのは、保険金が支払われる仕組みについてだ。民間保険に入るためには、保険料を支払うが、同じ保険に入っている人が病気などになった場合、その人に払った保険料の一部がわたされる。この事を知り、保険とは、「助け合い」なんだなと思った。見ず知らずの相手でも、誰かを助けられると思うと掛金を支払う時も気持ちが良い。また、自分にもしもの事があった時も、仲間が助けてくれるのなら、心から安心できる。保険とは、一人だけでなく、他の人達との助け合いの精神があるからこそ成り立つものなんだと分かった。

私は保険に入っているけれど、お金を払っているわけではない。お金を払ってくれている祖母に話を聞いてみた。「保険といえば、昔の人はよくお守りと言っとったよ。入っているだけで、すごく安心するしね。あと、入院したりして、家族に迷惑かけたくないけんね……。」と自分と重ねながら話してくれた。たしかに、祖母くらいの年齢だといつ入院してもおかしくない。迷惑をかけたくないというのは、いつも私達家族をやさしく気遣ってくれる祖母らしいなと思った。そして何より、お守りとして私を保険に入れてくれた事に、胸が熱くなった。

そんな祖母の夫である私の祖父は、私が四年生の時に亡くなった。病気とは全く無縁だったが、庭の木を剪定していた時に倒れ、そのまま亡くなってしまった。祖母も私達家族も、あまりに急な事で、困惑し、呆然とした。そんな時保険や葬儀の手続きなど、祖母の気持ちに寄り添って動いてくれたのが、保険会社の人だった。祖母とは、昔からの知り合いだったそうで「すぐに来てくれて、いろいろと教えてくれたから、ほっとしたよ。」と祖母は言っていた。こんなふうに安心できたのは、きっと、長い付き合いのある保険会社の人を信頼していたからだ。その人には、今も法事の時など、たくさんお世話になっているそうだ。

祖母の話を聞くまでは、保険と言われても、あまりピンとこなかった。だが、保険が助け合いの気持ちで成り立っている事や、人とのつながりの中で安心を提供していくものであるという事が分かった。また、意外と身近な存在で、今日も誰かの役に立っているという事も知った。

私が大人になった時は、社会の制度は随分変わっているだろうし、今とは全く違う暮らしをしているかもしれない。そんな中でも、保険という助け合いは残っていくし、そうであってほしいと思う。また、人とのつながりの中で安心を提供していくものでもあってほしいと思う。

そして、『お守り』として私を保険に入れてくれた祖母のためにも、元気に学校生活を送っていきたい。